

清水寺増井もすみて安⁽¹⁴⁾

居の天神又幸に相坂の⁽¹⁶⁾

水を掬いてみかへれば

合法か辻焔摩堂有や⁽¹⁷⁾

おそろし歳賤⁽¹⁸⁾か身の

罪を減す一心寺駒繫

きの松年旧りて千世

の例⁽¹⁸⁾の若みとり響くや

(14) 清水寺はもと有栖山寺といひ寛永十七年(一六四〇)京都清水寺の本尊千手観音像を模して安置する。依つて清水寺と改め、また京都清水寺の音羽の滝を模した市内ただ一つの滝「玉出の滝」は三條の美しい豊かな水を流しており、滝に打たれる人の姿あり。茶店の庭にある増井は、清水寺の南下にあり、門に増井の額を掲げている。上下二段の水柱に分けられていて上方は侍方で下方を町人方としている。天王寺七名水の一つ。

*天王寺七名水は、増井、亀井、逢坂(相坂)、玉出、安居、有栖、金龍。

(15) 天王寺境内に属する。祭神は少彦名命。毎年八月二十日芝原祭という神祭がある。今は天満宮と称して、諺に、菅原道真公築紫に左遷の砌ここに暫時休まし故に安居の名があるという。この地は小高い丘にあり眺望よく、そのうえ社頭に数株の桜あり、花の頃はひとしお賑わしい。西の山下に安井の清水がある。

(16) 一心寺門前の西にあり。七名水の一つ。小坂清水ともいふ。清冽にして何時も増減なし。茶に可なり。相坂の清水の西の辻をいふ。焔魔王の石像を安置する小堂あり。往昔ここに天王寺の学校院ありし古蹟という。

(18) 坂松山一心寺高岳院。浄土宗鎮西派智恩院に属する。本尊は阿弥陀如来。浄土宗の開祖法然の開山と伝える名刹。大坂冬の陣境内は徳川家康の本陣なり。夏の陣後家康は大坂城の殿材で堂宇を修築、山寺号を坂松山高岳院と改め、自筆の「坂松山」の額を寄せた。当寺書院の庭にある駒繫松は、大將軍茶臼山の陣営に行く途中ここに駒を繫がれた。幹の太さ老丈半、高さ二丈位、年輪を重ねてはいるが君子の操をあらわし、霜雪をいとわず蒼々として千代の色を見せ、御代と共に萬歳の声たえず、といふ。



合法か辻

風の颯々と布玖屋の坐⁽¹⁹⁾

鋪茶臼やまうしろに唐^(から)

迷^(め)く邪福禪寺法の

宮園西門の華表^(けい)に

掲乗しその額は釋迦

如来転法輪所当極楽

土東門中心とは小野

道風あ累は弘法大師の

(19) 天王寺石鳥居西。宴席風流にして座敷よりの眺望は殊に美景なり。春秋の花・紅葉はもとより、螢・時鳥・萩・薄・菊・雪の景色はひとしおすばらしく、年中遊宴の客絶えることなく賑わしい。

(20) 一心寺の北にある。一説に荒陵^{あらいりやう}というのは此茶臼山のみなならず、凡てこの附近一帯に荒廢の陵墓が多いことから荒陵という。大坂冬の陣では徳川家康の本陣がおかれた。夏の陣では真田幸村が陣を敷き東軍と戦い敗れる。

(21) 一心寺の東。荒陵山四天王寺敬田院。聖徳太子の草創。最初八宗兼学の大伽藍の地。今時天台宗江府東叡山日光御門跡に属する。一名難波寺、また難波大寺、また御津寺法花園、また堀江寺、また荒陵寺ともいう、日本最古の寺。伽藍配置は「四天王寺式」といわれ、中門（仁王門）・五重塔・金堂・講堂が一直線上に並び、中門の左右から延びる回廊は講堂に連らなる。西門の「石の鳥居」はわが国最古といわれ、その編額に「釈迦如来、転法輪所、当極楽土、東門中心」とあり、西門は極楽浄土にいたる東門だという信仰を生み、夕陽を仰ぎみる好適の場所として有名。参詣は年中絶え間なく、なかんずく二月の涅槃精霊會（大会という）、また春秋の彼岸會、七月の千日詣などは老若男女群参し広大な境内は雑沓する。

。西門の鳥居の編額「釈迦如来転法輪所当極楽土東門中心」の文字は、寺説によると皇太子の真跡と云う。しかし、小野道風の筆とも、また弘法大師なりとも云う。いずれとも詳かならず。

。仁王門におうもん 南大門の内にある。金剛力士の像を安置す。

。五重の塔ごじゆうのた 金堂の南にある。層毎に雲水の彫物があり、ゆえに雲水塔ともいう。釈迦画像・四天王木像・八祖画像を安置する。

。金堂きんどう 南大門の内にいる。本尊如意輪觀音・弥勒仏・四天王・十二天画像・波羅門像・宝塔一基を安置す。

。講堂かうどう 金堂の北。阿弥陀仏・觀音・勢至・虚空蔵・四天王・誕生仏などを安置する。皇太子この堂にて諸経を講讀されたことにより講法堂ともいう。

。六時堂りくじどう 蓮池の前にある。この堂において六時礼讃を勤められたことにより名とする。薬師如来・日光・月光・千手觀音・四天王・不動明王ほかを安置する。

。石舞台いしぶたい 蓮池の上にある石台。

。俗人の音楽よこひな 太子四十一才のとき、百濟国より味摩之という楽人が来て、伎楽・管絃の曲をはじめて我が朝廷に伝えた。太子は大和国桜井村の子供三十二人を俗人と定め、かの楽人に習わせた。三宝供養の際は、音楽・舞曲を奏して仏恩を讃嘆あり以来、朝廷をはじめ諸寺の法筵には必ず楽を奏する事を風俗となった。楽には右方と左方の二流があり、この寺は右方なり。

。亀井水 宝蔵の南にある。霊泉は金堂の中にある青竜池より流れ出づる。白き石の間より玉の如く清水涌出ることから白玉出の水という。また石鐮の亀より流れ出ることから亀井の水という。

。経書堂きやうどう 経木書写の僧そう これを守る。

。秋の坊あきのぼう 西門の北にある。当寺、公文所三綱職と号して、世々一山衛護の家。

。西僧坊さいそうぼう 東僧坊の西にある。すべての僧坊は、一舍利・二舍利および十二坊の寺僧等の居住の所。一舍利・二舍利は役儀の号であり、一の舍利出し・二の舍利出しを略したもの。毎年正月生身供の時、堂司の役僧が一の舍利出し・二の舍利出しと呼んで、供物の配分する。

。庚申堂かうしんどう 南大門の南にある。青面金剛・梵天帝釈・薬師如来ほかを安置する。庚申の日毎、詣人大いに群をなす。

書績^(跡)悲しといひつたふ

八宗兼学も大伽藍聖

徳太子の創建なり二。

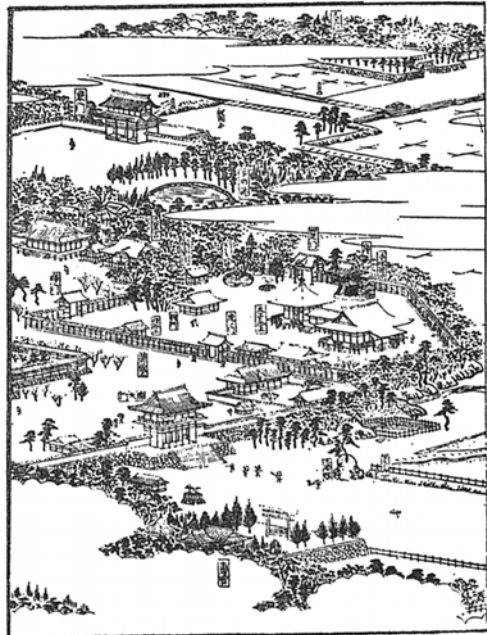
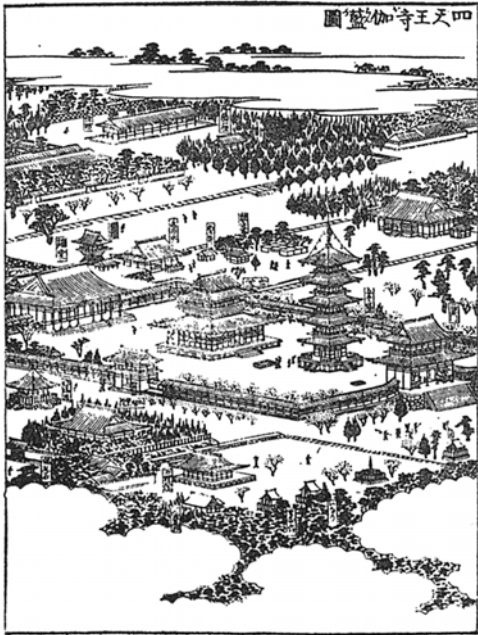
王門五重の塔金堂講堂

六。時堂はちすのいけの

石。舞台右方さすに

伶人の音楽舞曲を奏

するなり亀井にて



四天王寺伽藍図

向経。書堂当山の公文くもん

所は秋野坊一舍利二しよ

舍利十二坊元三大師は

北の門南門いて、庚申堂

東へともり弓手ゆんでにむけは

桃とちもとに上野うのみや

香迄匂ふなるうめ屋敷うめ

染むる紅葉の宝樹寺たから

(22)

(23)

(24)

野中の南にあり。祭神は欽明天皇。社頭に桜・萩など数株ありて春秋に美観なれば、衆人群集して賑わしい。生玉社の東にある。園内に数株の梅を植え、樹の下に席を設ける。如月の花の頃には四方に香広がり、道行く人もただに通り過ぎるもならず、ましてや風流の好士等は群れて遊覧する。秋には菊の花壇をつくり、春秋ともに美観の勝地なり。この梅屋敷は文化初年の頃、江戸亀戸の梅屋敷を模してつくられた、という。

梅屋敷の北にある。日蓮宗女僧寺。本堂の後の方僧坊の庭に楓の大樹数株あり、紅葉の頃は風流の客が競って遊楽する。林泉の風景は絶佳の勝地なり。



天王寺 庚申参り

や野⁽²⁵⁾中の観音味原⁽²⁶⁾の

産湯の名泉真田⁽²⁷⁾やま

めてにふりかへ阿部野⁽²⁸⁾

みちさたかならすも

小町⁽²⁹⁾つか頭家卿⁽³⁰⁾の大名

墳また経塚⁽³¹⁾もむほとう

松虫⁽³²⁾つかも草のかけ

御勝山⁽³³⁾の麓なるなかれは

(25) 東高津野中にあり。遍明院と号する。本尊十一面観音(行基の作)。始め日向の宮崎にあったがゆえあって江

州三井寺知増院に移し、後世ここに遷されたという。玉造小橋附近より天王寺までの間は、すべて一円の桃畑なり。この野中の地はまったく桃の最中で、花の盛りには天も酔える光景なり。されば物言わぬ花の下を、人は口を休むことなく思い／＼に謳ひつれつづ樽や瓢や花の枝うち語り合う楽しみは、桃源の仙境はいざしらず、その一時の栄花にて千年も延びる心地になるという。

(26) 産湯の清水(味原池の南にあり)。大小橋命の産湯の清水という。混々と湧出す清浄は濁ることなく、その水量と清浄とは他に越えるものなし。

(27) 玉造の南にあり。大坂冬の陣に真田幸村が出城、真田丸を築いた古戦場。この丘に狐穴多く奇なり。この地は高い丘山にして、東の方を見わたせば、比叡山より峰つづきて、南に連らなり、志貴・生駒・二上山・金剛山まで一望されるたぐいなき光景なり。

(28) この地は天王寺南大門より住吉に到る道を云う。往昔の本街道で、今、安倍野街道という。最も旧跡多し。小町墳・頭家卿墳・経塚・松虫塚いずれもこの街道の左右にあり、南北二、三町の間にある。

(29) 俗に小野塚とも云うが、事実詳ならず。小野小町が老後ここに庵を結び、その終焉の所という。

(30) 北畠頭家卿の墓。世人大名塚と呼ぶ。陸奥国司兼鎮守府將軍北畠頭家卿、元弘四年(一八四七)五月、この野で戦死された。塚の上に古松一株あり、その下に碑あり。

(31) 小町塚の側にあり。世人曰く、上宮太子(聖徳太子)一石一字の経を書写しここに蔵め給う遺跡という。阿部野村より二町西北の側にあり。むかしの官女塚、松虫という官女の名なり。昔は自分の領地に葬ることあり。領主変わればみな荒塚となり姓名を失う。

(32) 岡山。大小橋命の墳墓がある。慶長・元和の間、幕府徳川秀忠この地に陣営を構え勝利を得たり、世人崇敬して御勝山と名づける。この丘は四面に妨げるものなく眺望絶景の勝地なり。

うとむ鶴のはし国分寺

には奇瑞なる雷よけの

黄金佛唾吐出せて舎

利寺には和泉式部の腰

かけ松聖天山に丸山や

兼好法師の跡ふりて

天下茶屋の和中さむ

森をしるしに紹鷗の

(34) 国分寺村にあり。禅宗黄檗派天徳山と号する。本尊は聖観音(黄金仏、往昔、聖武天皇御護仏という。右手に瓶を持ちて、奇作、天竺仏ともいう)。当村に雷落することなし。これは本尊の奇瑞なりという。世に雷除の観音と称される。

(35) 舍利寺村にあり。禅宗黄檗派南岳山舍利寺と号する。聖徳太子の草創。本尊は仏殿釈尊。和泉式部腰懸松が書院の庭中にあり、事実詳ならず。また、太子が長者の子から仏舍利三顆を吐き出させ、一字の寺「舍利寺」を建立した説話あり。

(36) 丸山の南にあり。真言宗海照山正円寺と号する寺あり、境内はうす高い丘山にあり、眺望光景よく桜、楓の木数株ありて春秋は風景勝る。さつき、萩の花盛は美艶にして四季を問わず詣人遊覧の勝地なり。

(37) 阿倍野街道の西にある小山。この地は丘山にて眺望の勝地なり。伝え聞くに、往古より吉田兼好法師乱を避け、阿倍野の命婦丸の家に寄り、薙を織りて業をなすという。その旧跡なり。

(38) 天下茶屋村。伝え云う、往昔豊太閤堺へ御往還の御、この地の茶店にて休まれたことにより名づく。寛永四年に開業した通称是斉屋(津田是斉薬舖)は「和中散」という散薬を方々に広めた。薬店の間口数日間、床椅数脚を並べて往来の人を憩わし、薬を湯に立て施す。住吉参拜の人、紀伊・和泉に往還する人々などここに憩う人間断なし。

(39) 天下茶屋村中、南のはしにあり。茶人武野紹鷗(千利休の師なり)の住みし古跡なり。



是斉薬店



天下茶屋村

幽棲さゝひく幾茶の
 けふりたつ年月も墨
 江のそのふる事は千⁽⁴⁰⁾
 早振大神のすみたまふ
 宮居をさして左へたとり
 奥のてむ神五大力つゝく
 神宮寺大海しんいにしへ
 神功皇后の三韓を

(40)

祭神Ⅱ一ノ神殿底筒男命。二ノ神殿Ⅱ中筒男命、三ノ神殿Ⅱ表筒男命、四ノ神殿Ⅱ神功皇后。それこの大神は千早振る神代のとき、日向国小戸の橘の檣原より現われ給う、当社の御鎮座は神宮皇后紀十一年辛卯四月二十三日という。ゆえに今に至りて卯月上卯日の例祭あり。四つの神殿の宮造は、皇后三韓御退治のとき、当社は軍神なれば、宮造の様式は諸社に類なき構え。三社すすむは魚鱗の備え、一社ひらくは鶴翼の冊を顕し、いわゆる八陣の法、これを住吉造という。四つの鳥居四方に立ち瑞籬は四維に囲り、摂社末社三十余整然と連なる。詣人は晴雨をかまわず間断なく、また風光明媚の地は文人・墨客の来遊も多く、いつの間にか和歌の神として歌人に尊崇を集めた。

神宮寺(本社の北にあり)。本尊Ⅱ葉師仏。旧号新羅寺。天台宗東叡山に属す。宝蔵に五大力菩薩の画像五幅を安置する。

大海神社(玉出島の上なり)。祭神Ⅱ豊玉彦神豊玉姫神二座住吉神社の摂社。建物は本社よりも古く、宝永五年(一七〇八)で、大社と同じ「住吉造り」。

貴布祢の宮(蓮池の南にあり)。祭神Ⅱ罔象女、相殿高籠。夏日旱天のとき、雨乞いの霊応すみやかなりと。

往合の社(住吉社頭の社をいう)。

便宜水 社頭のみたらしをいう。すべて神社にあり。

市えびす 市笑姿神祠 祭神事代主命。

玉出島(住吉社頭にあり)。社伝に言う。神宝満珠の蔵め祀る所なり。島は海の中にのみあらず、一区なる所をいう。

子安の社(四の神殿の南に北向きなり)。産霊社とていう。

誕生石(社頭、猪鼻のはとりにあり)。島津忠久出生の古跡なり。源将軍頼朝、丹後の局を寵愛し懐妊する。

政子の方深く姫み、本多次郎に命じて丹後の局を由井浜にて殺さしめんとす。本多、お痛しく思い共に逃がれて紀伊国熊野浦に赴かんとす。住吉の社に至るとき臨産の気色あり。本多驚き、褥を石の上に打ち掛け、局を居させ、住吉大神に祈り安産をまつ。産の紐易く解けて一男子を出生する。その後、建久元年(一一九〇)

頼朝上洛の時、本多この事を告ぐる。頼朝大いに悦び、即座に伊賀・伊勢両国を賜う。同十三年、大隅・薩摩の両国を与えて、島津三郎忠久と号すと云う。島津家の子孫当社を厚く尊崇し、この霊石に瑞籬を造り、注連を曳き神灯を献る事今も変らず。

反橋(右鳥居の前にあり)。反橋高灯笼をもって世俗当社の景物とする。

征伐し給ひし時当社は

さし母軍神とて御

宮造のさまかはり三社

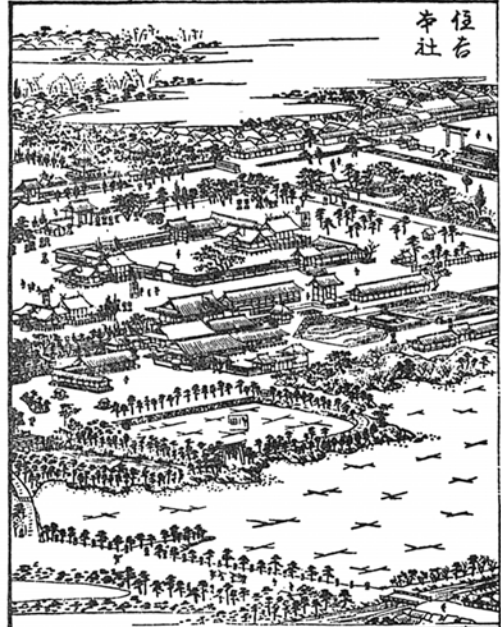
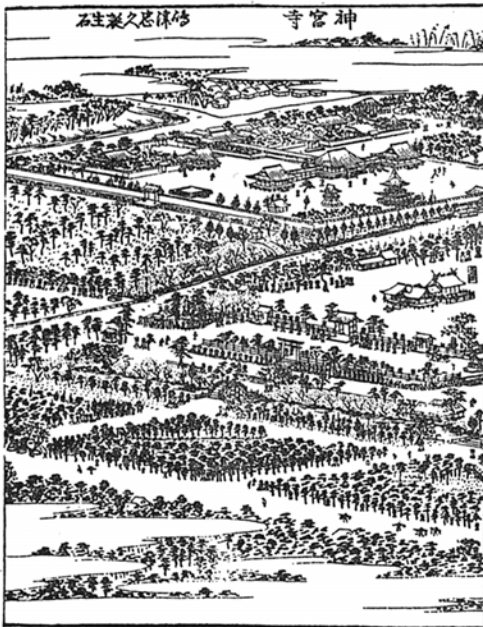
すゝむは魚鱗（ぎよりん）の備へ

一社ひらくは鶴翼の囲み

をあらはし連並ふ是を

八陣の法住よしつくりと

伝へきく嘶きいさむは



住吉本社 神宮寺 島津忠久誕生石

反。橋をわたり潮崎絶

せぬ岸⁽⁴¹⁾の姫まつの花

姿⁽⁴²⁾くはるを出見の濱

高燈籠より眺れは行

かふ船の真帆あけて

波静なる長峽⁽⁴³⁾のうら

弥生三日の汐干には老も

若きも幼きも吾妻

(41) 新家の北、街道の東の方に松原あり。いにしへはこの辺りまで浪打ちよせて岸であったといひ、岸の松原の残りという。この北に帝塚山があり、風景いたってよろし。
 (42) 出見の浜にあり。出見の浜は、今の松原の浜をいう。黒塗りの大燈籠は、夜に走る船の方角を失うとき、住吉大神を祈ればこの燈籠の灯ことに煌々と光鮮かなりという。

(43) 汐干が有名なり。弥生三日は、遠近より、ここに群参する。行楽の名所なり。



出見浜高灯籠